
超不定形魔法少女ふうか

九九人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超不定形魔法少女ふうか

【Nコード】

N4861Y

【作者名】

九九人

【あらすじ】

こんなタイトルだけどりりカルな魔法少女とか虚淵魔法少女を期待しちゃあいけない

正義の味方の魔法少女である私は今日も怪物怪獣怪人その他いろいろから、ご町内の平和を守っている。今日の相手は三町目の鈴木修。修は職場のバイトの子を可愛いな、とちょっと思ってしまった。一緒にホテルに入った。そこであれやそれや女の子として奥さん以外の女の味を覚えてしまつて、それからたくさんの女の人とあれやそれやした。

あれやそれやした女の人の一人が奥さんに嫉妬して、無言電話をかけまくったり近所の皆さんに『三丁目の鈴木さんは誰それと寝ている』だの悪質なビラをばら撒いたせいで、奥さんは対人恐怖症になつて病院に通うようになった。病院代は馬鹿にならないし近所の奥様方からはハブられるようになるし、だんだん追いつめられていて、精神科でもらつた睡眠薬を大量に飲んだ後手首を包丁で切つた。お母さんが倒れているのを学校から帰ってきて発見した長女の良子ちゃんはきゃあああああと叫び声を上げてその場で失禁した。我に返つた良子ちゃんは誰かに笑われると思つたのか、粗相の後を雑巾で拭いてパンツを洗濯機に突っ込んだ後、救急車を呼んだ。けれどお母さんは病院につく一歩手前で死んでしまつて、良子ちゃんの心の中に『もし私が床の掃除をする前に電話をしていればお母さんは助かつたんじゃないか』という一生残るトラウマを植え付けた。良子ちゃんと私は同級生で、一緒に給食を食べるくらい仲が良かったんだけど、給食にトマトソースのかかったチキンが出てきた時に良子ちゃんは、包丁で切り裂かれたお母さんの赤かつたりちよつと白い骨が見えていたりしたのを思い出して床に「うぼげええええ」と吐いた。私のお気に入りだった花柄でピンクのフレアスカートに黄土色のゲロがついて嫌な気持ちになった。クラスの何人かがもらいゲロをして三年三組の教室はゲロまみれになった。

それもこれも全ては鈴木修が女の人とあれやこれやしたせいだ。

クラスの平和を守るのも魔法少女の仕事なので私は魔法で瞬間移動をして、いかがわしい臭いのするホテルに辿りついた。修はこのホテルの六〇八号室にいて、女の人の足の間に指を突っ込んでいた。修の頬の肉はでっぷりと垂れていて、表情はやらしい。脂肪の乗ったバルーンみたいなお腹をしていた。

私が部屋の中にいることに気が付いた修はモチを喉に詰まらせたような変な表情をした。

「……何でこんなところに子供が？」

「さあ？」

女の人も怪訝な顔をして私を見ている。私が見ている事に気が付いて、修は指を抜いた。

「お、おい、お嬢ちゃん……な、何でこんなところにいる？ お父さんとお母さんは？」

「初めまして。私は良子ちゃんのお友達の風香と言います」

どんな人になんて礼儀って大事だよ。ぺこりと頭を下げて、ご挨拶。「ああ、そう。娘の友達……」と修も続けてほんの少しだけ頭を下げた。この隙に私は背中中に隠してあった相棒を取り出した。素敵な素敵な魔法のステッキ。ペロペロキャンディをそのままでつかくしたような形をしている。この魔法のステッキから出てくる魔法の球に当たった人間は死ぬ。何でかってそんな事は知らないけど、魔法なんだからしょうがない。

「うりゃ！」

バツコンという前頭骨が凹む音がして修は仰向けに倒れた。鼻血がすうと流れて口からは泡を吹いている。

「うりゃ！ そりゃ！」

バツコンバツコン。この程度では良子ちゃんの痛みには届かない。もっと罰を受けろ。もっと罪を償え。バツコンバツコン頭頂骨側頭骨鼻骨頬骨下顎骨が折れて凹んで、たるんだ頬がもっとたるんだるんになった頃にはとっくに修はこと切れていた。これで今日の戦いは終了だ。

「ッヒイイイイ！ ス、スズキさんが！ し、ししししし死んでるううう」

ベッドの上にいる裸の女がとても煩かったがそのままにして帰った。私には翌日も怪物怪獣怪人と戦わなければいけないのだから構っている暇なんてない。

次の日の相手はアムタ製薬の村田海人。海人は社長の御意見番で、自分が会社にいらないと思う社員を社長に進言してリストラさせ、たくさんの方を失業者を出した。許せない。今日も私は魔法のステッキを振り上げる。パソコン。その次の日の相手は弁護士吉田大樹。国選弁護士として痴漢冤罪の川田博之の弁護を担当したが、彼の事を信じず職務を怠慢し、気付いた時には刑が確定していた。今日も私は魔法のステッキを振り上げる。パソコン。さらに次の日の相手は相撲取りの浜田順平。賭博。パソコン。私の魔法少女としての生活は辛い事もあるけど、充実した毎日を送っている。

さらに高校生の加藤エリカと政治家の飯嶋一志と主婦の渡辺敦子の頭蓋骨を凹ませた次の週の木曜日。今日は私の誕生日だった。今日で私は十一歳になる。誰かからプレゼント貰えるかなーとるんるん気分です学校へ登校した私を校門前で待ち構えていたのは険しい目をした良子ちゃんだった。

「良子ちゃん、おはよう」

その空気に気付かないふりをして元気に挨拶をした。一日の始まりはやっぱり元気な挨拶からだよね。しかし私が挨拶をしてあげたのに良子ちゃんは挨拶を返さず、むしろ険しい目を私に向けてきた。なんなのと思ったのもつかの間、良子ちゃんは地面にうずくまってゲーゲー喉を押さえて言いだした。え、また吐くの？ こんな朝っぱらから？ 勘弁してよーと思ったら良子ちゃんが口から吐き出したのは私が使っているのと同じ魔法少女の魔法のステッキだった。よだれと胃液でべたべたのステッキを良子ちゃんは握って先端を私に向けた。

「りよ、良子ちゃん、どういふこと？」

「ふうかちゃんを人を殺した。殺したら裁かれなきゃいけない」

「何で？ あの人たちは悪い事して人に迷惑をかけてたんだよ。私には裁かれる理由なんてない」

「人殺しは人殺し、だよ」

魔法のステッキから魔法の球が飛び出てくる。魔法の球は私の頭に淀みなく飛んできて、バツコン、と私は自分の頭蓋骨が凹む音を聞く。視界が暗転して地面とキスをしてそのまま動かなくなった。もう一回バツコンという音を聞いたから多分良子ちゃんは自分で自分の頭蓋骨を凹ませたんだろう。くっそーあのゲロはき女め。私を殺しやがって。

死後の世界で私は考える。どうして悪い人はいなくならないんだろう。そもそも悪いって何？ どういう意味？ 私は悪い魔法少女だったの？ 悪い魔法少女は魔法少女に頭蓋骨を凹まされなければならぬの？ いやあ何で悪いと頭蓋骨を凹まされなければならぬの？ 考える考える。けど考える脳みそは良子ちゃんに頭蓋骨を凹まされちゃったおかげで一緒にべこんと凹んじゃって、本当のお味増みたいにドロドロになってるから役に立たない。ぐっちゃぐっちゃに思考があっちゃへいたりこっちゃへいたり。集中力なんかありやしない。こりゃあきつと、次の算数のテストは零点だね。

考えて考えてぐっちゃぐっちゃになって、もうめんどくさくなくて、とりあえず神様のせいにしとけて結論になった。やっぱり最終的には人に罪をおしつけちゃうのが一番楽なんだよね。だから神様が悪い！ そう決めた！

鈴木修が女の人とあれやこれやしたのも村田海人がたくさんの人をリストラしたのも吉田大樹のやる気がないのも私がたくさんの人を殺したのも良子ちゃんが私を殺して自殺したのも、人間がダメダメなのも全部全部全部、神様が悪い。悪い人は裁かなくちゃいけない。私は神様の頭蓋骨をバツコンと凹ませるため、広大な宇宙へと旅立った。

だから、神様の頭蓋骨をバッコンさせたらみんな幸せになるよね？

私が宇宙へと旅立ってから長い年月が流れた。詳しい時間は分からないけど、多分八、九年くらい？ 分かんないけど。もう少女って言えるような年齢じゃないけど心はまだ少女のつもり。らんらん。

二十歳っていう年齢が少女かどうかの議論はともかく、この長い旅の間私は食事をとっていなかった。水も飲んでいないしさすがに我慢の限界。何か食べ物が欲しい食べ物だ。

けれど、あたりを見回しても水星とか金星とかそんなのばっかで食べ物らしきものは何もない。困った困った。そんな腹を空かせた私の目の前にはペロペロキャンディーによく似た魔法のステッキがある。

じゅるり、と出てきたよだれを拭いて考える。これ、食べられるかなあ？ うん、食べられそう。すぐく食べられそう。美味しそう。いいよね？ もういいよね？ このステッキが無くなっちゃった

ら私は魔法少女でも魔法ババアでも何でもなかったあの二十歳くらいの女の人になっちゃうけどもうそれでもいいよね？ 頑張ったもんね私。神様殺さないでここまででいいよね？ ごめんね、地球のみんな。

いただきます。

了

(後書き)

自己満足な暗喩ばかりですいません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4861y/>

超不定形魔法少女ふうか

2011年11月14日03時28分発行